

# KELES Newsletter

## 関西英語教育学会報 2018年度 第3号

事務局：〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学 教育学部 教員養成課程 橋本健一研究室内

E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ウェブサイト: <http://www.keles.jp/>

2019年1月27日発行



### 報告 関西英語教育学会2018年度 第45回 KELESセミナー

第45回セミナーは「英語学の知見を活かした授業実践」というテーマで、英語教師として知っておくべき英語学の「知識」の面と、それを生かした多様な「実践」について、幅広くお話いただきました。講師をお引き受け下さった高橋先生、中川先生をはじめ、ご参加くださった皆様、会場を提供して下さった関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

以下、それぞれの講演の報告を記します。

#### 講演 1

#### 「英語学を学ぼう：英語学習に役立つ概念と派生語の仕組みについて」

高橋 勝忠（京都女子大学）

英語学を授業作りに生かす、と一概に言ってみても実際に英語学の知見を用いて授業を行う際には、その概念や専門用語などの確認・理解などに時間がかかり、どのように学習時に効果的に採用できるのか困難に感じることも多いのではないだろうか。「英語学セミナー：思考鍛錬のための言語学」などのご著書でも著名な高橋勝忠先生は今回のセミナーで、英語学習にどのように英語学の知見に生かすことができるのか、具体的な方法について数々の例を出しながらお話しくださった。

高橋先生は、英語学習の際に役立つ、形態論・統語論・意味論の分野から得られた意味概

念や構造概念・派生語の仕組みについて、実際に学生から授業中に出た問いに答えられる形で明快にご説明された。

まず、意味概念に関しては、新情報／旧情報・他動性・有界性／非有界性などについてご紹介された。例えば、話し手と聞き手がすでに知っている既知情報である旧情報と、新たな情報である新情報は、情報の重要度を段階化したものであるため、文の中では旧情報→新情報の順で出現する。そのため、“John gave up the problem.”が“John gave it up.”になるとなぜ“the problem”である“it”が“up”の前に移動するのかという学習者の疑問に対し、“the problem”が“it”（代名詞）という旧情報となることから移動する必要があるため、と説明することができる。また、行為の主体がその行為によって対象にどの程度の影響を与えるかという他動性の観点からは、前置詞を取ると、対象に対する影響が弱まるということを理解することで、“John climbed Mt. Fuji.”と“John climbed up the mountain.”が意味的に異なるということへの理解が容易となる。構造概念に関してはC統御のお話があり、この概念を理解することで、なぜ形容詞・名詞の後に名詞句が続く際に前置詞が必要となるのかを理解することができ、これらは英作文指導時などにも非常に役立つと感じられた。

また、多くの英語学習者が困難を感じる単語の学習に役立つものとして、派生語についてもご説明いただいた。派生語の仕組みである接辞や階層性についてなどのお話に加え、特に形態論規則であるIS A条件・右側主要部の規則や、複合語と句の意味の違いについて、写真や絵、例などを交えてのご説明を聞き、これまで釈然としていなかったものがストンと腑に落ちたと感じた。

最後に高橋先生は、英語学の知見を英語学習に活用するためには、理論の枠組みにとらわれることなく、学習者の疑問に対し一番わかりやすいものを採用した説明を心掛けることが重要であると強調され、そのお言葉は強く心に残った。英語学の知見を活かし、どのように学習者の疑問に向き合っていけるのか、日々英語学習に関わる私たち一人一人にとって、大変多くの示唆に富んだご講演であった。

(報告者：桃山学院大学 濱田 真由)

## 講演 2

### 「英語学と英語教育の橋渡し ～語彙・構文・文法の実証研究からの示唆～」

中川 右也 (鈴鹿高等学校)

中学校教諭時代、ガチガチの文法説明に時間を割く同僚や先輩と対立し続けた経験から、「英語学に基づく授業」と聞くとそういうイメージしか持てなかった。そんな価値観がガラガラと崩れ、英語学の可能性の大きさに目

を見開かされる、あつという間の1時間半だった。句動詞、前置詞、仮定法等、一つずつ丁寧に目から鱗の理論的根拠が示され、しかもそれぞれがすべて実践に裏打ちされたもので、データ、生徒の声、動画などから、目を輝かせて学んでいる生徒の姿が立ち上がってくるようだった。イラストやシール、ジェスチャーを使って「ぴたっと感」を体験させ、ルールを教えるのではなく身体感覚で体得させていく。

「構文とは、エネルギーの変化を明確にするもの」との説明が、聴衆にも身体感覚ですとんと落ちていく。さて、事後テストよりむしろ遅延テストで差が出るのが中川実践の特徴である。もちろん、身体に残る感覚は長期記憶に直結するという分析が成り立つが、中川先生は「生徒は、学びが楽しいと思うと、指導が終わった後も学ぶ」と述べられた。そう、これはautonomyを育てる授業でもあったのだ。講師紹介の山形先生が「中川先生は私の人生を変えたが、今日はスリルあふれるお話で多くの方の人生が変わればいいと思います」と最初に言われた時に笑いが起こったが、それは誇張ではなかった。この日の参加者は特に、学生さんや若い教員が多かった。セミナー終了後も、お話を聞きたい若い人が、中川先生の前に列をなしていた。人生が変えられた人も多かったに違いない。

(報告者：京都外国語大学 山本 玲子)

## 第22回卒論・修論研究発表セミナーのお知らせ

標記セミナーが以下の通り開催されます。多数のご参加、お待ちしております。

■ 第22回卒論・修論研究発表セミナー  
日時：2019年2月11日(月・祝) 9:00-17:25  
会場：関西国際大学 尼崎キャンパス  
参加費：会員・非会員とも 500円  
セミナーウェブサイト：  
[http://www.keles.jp/news/keles22\\_thesis/](http://www.keles.jp/news/keles22_thesis/)

スペシャルトーク：

玉井 健 先生 (神戸市外国語大学)

「英語教育における授業実践をどうとらえるか：人間科学的視点のもたらす方法論的ヒント」

詳細は同封のプログラムをご覧ください。19件の卒論・修論発表に玉井先生のスペシャルトークと盛りだくさんです。皆様のご参加を心よりお待ちしております。